

第一章 鳥海山北麓の自然と暮らし

第一節 鳥海山北麓の地勢

(一) 由利本荘市

由利本荘市は、秋田県の南西部に位置し、北は秋田市、南はにかほ市、山形県遊佐町・酒田市・真室川町、東は大仙市、横手市、湯沢市、雄勝郡羽後町に接し、県庁所在地である秋田市には二〇～六〇kmの圏内にある。平成十七年(二〇〇五)三月に、旧本荘市と周辺の七町(矢島・岩城・由利・大内・東由利・西目・鳥海)が合併して誕生し、平成三十年十月末現在で人口七万七四五二人、世帯数三万五七七である。

市域は東西約三三・三km、南北約六四・七km、面積は二二〇九・五九km²で、秋田県の面積の約一〇・四%を占め、県内で最も広大な面積を有している。

地目別では、山林が約七五・七%(約九一六km²)、農用地が約一〇・八%(約一三二km²)で、宅地は約二・一%の約二五km²となっている。

気候は県内では比較的温暖な地域であるが、海岸部と山間部では気候条件が異なり、特に冬季においては積雪量に差がみられる。

南に標高二三三六mの秀峰鳥海山、東に出羽丘陵を背し、中央を県内第三の規模の一級河川子吉川が貫流して途中笹子川、鮎川、石沢川、芋川等の支流を集めて日本海に注いでいる。

鳥海山と出羽丘陵に接する山間地帯、子吉川流域地帯、日本海に面した海岸平野地帯の三地帯から構成されている。

山形県との境界に位置する鳥海山は、東北地方では福島県の燧ヶ岳(二三五六m)に次ぐ第二の高峰で、玄武岩と安山岩の成層火山である。山

頂部には山体崩壊によって生じたカルデラが西部(西鳥海)と東部(東鳥海)にある。秋田県側の東鳥海は北に開いた東鳥海馬蹄形カルデラを中心とし、山体の表層部は若い溶岩流で覆われている。火山の活動史は大きく三期に区分され、第一期(約五十五～十六万年前)はこの火山の主体を形成した時期、第二期(約十六～二万年前)は溶岩が西鳥海山の表面を覆った時期、第三期(約二万年前以降)は山体東部に円錐形の東鳥海山が形成された時期である。約二六〇〇年前、東鳥海山の山頂部が崩壊して岩屑なだれが北から

北西に流下し、北に開く馬蹄形カルデラが生じた。鳥海山の北側に広がる由利原の多数の流れ山はこの堆積物の地形である。その後の活動は、この馬蹄形火口内における溶岩の流出と水蒸気噴火が主体である。歴史に残る享和元年(一八〇一)の噴火活動では、新山溶岩ドームが形成され、昭和四十九年(一九七四)には小規模な水蒸気噴火があった。独立峰であるため頂上からの眺めが素晴らしく、一帯は国定公園に指定されている。また、平地から眺めると裾が大地に広がっている容姿から、「秋田富士」あるいは「出羽富士」とも呼ばれている。本市内には矢島・猿倉・百宅の三方所に登山口があり、それぞれの登山道で特徴が異なっている。チョウカイフスマ、イワカガミなどの高山植物も多く、この山でしか見ることのできない花々も魅力の一つで、日本百名山の一つに数えられている。本海獅子舞番楽の発祥は鳥海山麓の村々と伝えられ、信仰の山としても古くから崇敬されている。

子吉川下流域には平野(本荘平野)が形成され、水田を中心とした穀倉地帯になっている。子吉川の河口域に位置する本荘は、近世には湊町・城下町として発達し、北前船が寄港するなど、経済・文化の拠点として栄え、現在に至っている。また、鳥海山や出羽丘陵を水源とした子吉川水系の大小の河川による浸食・堆積等により形成された流域上には段丘が発達し、旧石器時代から近世・近代に至る数多くの遺跡が確認されており、この段丘上を中心に現在本市には四六〇カ所を超える遺跡が存在している。

ほぼ直線的な海岸線を描く日本海に面した海岸平野地帯には、砂丘地が海岸線から幅〇・五～三・〇kmにわたって分布している。ほとんど全部が現世の風成砂で、砂丘の高さはほとんどが八〇m以下で、最高一二一mに及んでいる。砂丘砂の厚さは五m前後、最大では三〇mである。この南北に連なる砂浜の海岸に沿って、北から順に岩城地域・本荘地域・西目地域には海水浴場と漁港が点在している。子吉川河口部から約四kmほど上流の子吉川とその支流芋川との合流点には、約七〇〇年前の縄文海進のピークを迎えた時期の菖蒲崎貝塚が所在しており、数少ない日本海側の最も古い貝塚として知られている。

(参考文献)

『気象庁 鳥海山』気象庁、気象庁HP (<https://www.jma.go.jp/jma/>)。
 『鳥海山―地形の概要―』産業技術総合研究所、地質調査総合センター (<https://gbank.gsj.jp/>)。
 中野俊・土谷信之『鳥海山及び吹浦地域の地質』地質調査所、一九九二年一月。
 大沢禮・高安泰助・池辺穰・藤岡一男『本荘地域の地質』地質調査、一九七七年十一月。

(佐藤錠司)

(二) にかほ市

にかほ市は秋田県の南西部に位置し、南東には標高二三三六mの独立峰である鳥海山がそびえ、西には日本海を臨む山と海に抱かれた土地である。

気象庁の三十年間の気象データによる、にかほ市の年間平均気温は一二・七度、年間降水量は一五八九・七mm、一月、二月の最深積雪は約二〇cmといわれ、秋田県内では最も温暖で積雪量も少ない地域となっている¹⁾。桜の開花も県内では一番早く、要因として日本海を北上する対馬暖流の影響があるといわれている。

市の面積は、二四〇・七二km²で、秋田県内二五市町村中、一五番目の大き

さで、東西約一六・六km、南北に約二三kmの範囲に広がる。由利本荘市に接する東端は、東経一四〇度〇三分五七秒、日本海に接する西端が一三九度五二分二四秒、南端は山形県遊佐町に接し、北緯三九度一四分〇七秒である²⁾。

鳥海山の山すそが海岸近くまで延び、海に近い平野部に人口が集中している。平成三十年十月末の人口は二万四七七九人、世帯数は九四二三世帯となっている。市町村合併があった平成十七年十月と比べると、人口は約一九・三%減、世帯は約一%増加している。

地目別に土地の状況を見ると、森林原野が約六六%を占め、農用地が約一八%、宅地が五%となっている³⁾。

にかほ市の地質は、ほとんどが鳥海山による火山噴出物によって形成された土地である。鳥海山は約六〇万年前から活動した成層火山であり、多くの火山活動があつて現在に至るといふ⁴⁾。

にかほ市の大部分を形成した象潟岩なだれ堆積物は、埋没したスギの木による埋もれ木の年輪年代測定により、紀元前四六六年と判明している。

約二五〇〇年前に発生した鳥海山の山体崩壊以後、ラハールといわれる火山砕屑物と水の混合物の流動によって土地が形成された。その影響は、現在の標高八〇〇mにある中島台南部から平沢、芹田の海岸線まで及び、火山麓扇状地を形成しているといふ⁵⁾。

享和元年(一八〇一)には、鳥海山の新山溶岩ドームが形成され、現在の二二三六mとなった。最近の鳥海山の噴火活動は、昭和四十九年三月に日航機のパイロットにより発見されている。

旧仁賀保町の東部、日本海側の両前寺集落から、院内集落、桂坂集落の方向に約一三km、釜ヶ台・冬師と街部とを分断するかのよう、標高二〇〇mから五〇〇mの山地が延びている。この山地は「仁賀保高原」あるいは「巾山」といわれ、第三紀層からなり、その上に鳥海山の火山噴出物が薄く覆つ

ている。

また、鳥海山の噴火活動を歴史的に見ると、地震や河川の水質変化に伴う魚類の死滅などもあり、周辺の自然環境は鳥海山の影響を受けやすい地域となっている⁶⁾。

第三紀層には南北性の褶曲や断層が多く、鳥海山の北麓とくに仁賀保高原の西側から日本海にかけて、ほぼ南北に数条の断層が存在する。この断層を仁賀保衝上断層といい、北由利衝上断層系の一部とされる。北由利断層系は南北性の逆断層群が日本海沿岸に約二〇〇kmにわたって存在し、日本海沿岸の低地と羽田丘陵の境を形成している⁷⁾。院内・小国や象潟など油田の開発地域にもなったこの付近の褶曲構造が油田集油構造とも関連しているという⁸⁾。

地震は何度も発生していたようだが、古代については古文書等の記録による説明がなければ把握できないのが現状である。仁賀保地域の地震については、江戸時代後期から明治の初めにかけて記録された、院内の小川家にある日記に散見される。ここでは、文化元年(一八〇四)の象潟大地震だけでなく、天保四年(一八三三)十月二十六日におきた庄内沖地震などの記録が紹介されている⁹⁾。

酒田・庄内地方の資料には、元禄十五年(一七〇二)一月二十三日と同年二月二十三日、宝暦十二年(一七六二)九月十三日、安永九年(一七八〇)六月十八日に大規模な地震があり、記録が残されているが、にかほ市域に被害が及んだかどうかまでは定かではない。

文化元年(一八〇四)では、海岸地域が二m以上隆起したことがわかっていて、にかほ市小滝(旧象潟町)や横岡(旧象潟町)などがある上郷地区では、一mから三mの上下変動があったという¹⁰⁾。

市内の河川は、二級河川がほとんどで、白雪川水系と奈曾川水系がある。その他の河川として、両前寺川、琴浦川、阿部堂川、西目川、寒沢川、大沢

川、赤石川、象潟川、川袋川などがある。

白雪川水系には支流の鳥越川、岩股川があり、流路延長は二万九四五五mある¹¹⁾。白雪川の上流部には、にかほ市横岡(旧象潟町)があり、中流域には、にかほ市伊勢居地(旧仁賀保町)集落などがある。先述したように、鳥海山の噴火活動により河川の水質が変化し、魚類が死滅するということがたびたびあり、近年では昭和四十九年にあった¹²⁾。

白雪川水系の利水事業は、江戸時代末期から明治にかけて、支流の岩股川の酸性水と冷水を避けるため、伊勢居地・生駒家の家宰・池田五郎兵衛家によつて新川堰を開発して利水できるようにした¹³⁾。

その後、上郷地区を構成する長岡等の村々は、明治から昭和の始めにかけて、鳥海山の雪解け水を利用して水力発電に利用することになり、電力会社から多額の補償金が支払われることになった。水力発電に利用された水は、導管を通るため冷水となり、田畑の水として利用するためには温めなければならず、上郷地区に支払われた補償金を使い、温水路が建設され、現在も利用されている。

奈曾川水系には、支流に清水川を有し、流路延長は一万三二八mある。流域には、横岡集落や小滝集落が近接し、国指定名勝「奈曾の白瀑谷」がある。子吉川の小支川の一つである冷渡川や天拝川、大潟川については、上流部に、にかほ市冬師(旧仁賀保町)や釜ヶ台(旧仁賀保町)の集落がある。とくに冬師には、大潟溜池、長谷地溜池、扇谷地溜池、野際溜池など大小さまざまな溜池があり、冬師湿原を構成している。

なお、本節末に、にかほ市内で番楽が行われている集落の世帯数・人数(表1)、集落の標高(表2)を示した。

(註)

(1) 『にかほ平年値(年・月ごとの値) 主要要素』 気象庁・秋田気象台、気象庁HP (<http://>

www.data.jma.go.jp/jma)。確認した日付・二〇一八年十月三十一日確認。

- (2) 『にかほ市地域防災計画』にかほ市、二〇一五年二月、25頁。
- (3) 同右。
- (4) 林信太郎・山元正継「鳥海火山」『地質学雑誌』第一一四巻補遺、日本地質学会編、二〇〇八年九月、85～95頁。
- (5) 南裕介・大場司・林信太郎・片岡香子「鳥海火山北麓に分布するラハール堆積物の運搬・堆積過程と構成物質の時間変化」『火山』第六〇巻第一号、日本火山学会編、二〇一五年、1～16頁。
- (6) 植木貞人・堀修一郎「鳥海山の歴史時代の噴火活動に関する再検討」『日本火山学会講演予稿集』、日本火山学会編、二〇〇一年、56頁。
- (7) 西川治・奥平敬元・吉田昌幸・白石建雄「羽田丘陵新第三系に発達する変形構造」『地質学雑誌』第一一四巻補遺、日本地質学会編、二〇〇八年九月、75～85頁。
- (8) 大月義徳・小松原琢「鳥海山北麓、仁賀保衝上断層群の活動に関する資料」『活断層研究』巻二二号、日本活断層学会編、一九九四年、24～29頁。
- (9) 池田史郎『小川家文書に見る「地震」』雄波郷第八号、にかほ市教育委員会・にかほ市郷土史研究会編、二〇一四年三月、49～58頁。
- (10) 今村明恒『秋田新發田間精密水準測量によりて闡明した文化元年象潟地震明治二十七年酒田地震に伴へる地殻變形』、日本地震学会、一九三五年、185～195頁。
- (11) 『河川表△二級河川』秋田県建設部河川砂防課、美の国秋田ネット秋田県公式サイト、確認した日付・二〇一八年十月三十一日確認。
- (12) 『仁賀保町史 普及版』仁賀保町教育委員会編、二〇〇五年三月、236～237頁。
- (13) 『池田吉兵衛林房』『にかほ探訪』、にかほ市教育委員会、二〇〇五年、65～67頁。

(石船清隆)

表1 にかほ市の世帯数・人口

集落名	平成 30 年 10 月末				平成 17 年 10 月末			
	世帯	人口(男)	人口(女)	人口計	世帯	人口(男)	人口(女)	人口計
小 滝	140	191	187	378	153	264	279	543
横 岡	96	154	180	334	103	214	222	436
伊勢居地	62	86	95	181	64	125	141	266
釜ヶ台	45	63	69	132	48	92	96	188
冬 師	28	29	32	61	31	51	54	105
にかほ市	9,423	11,831	12,948	24,779	9,333	14,135	15,418	29,553

表2 番楽が行われている集落の標高

集落名	標高の地点	標高(m)
小 滝	上郷生活改善センター	164.5
横 岡	自治会館	229.5
伊勢居地	会館	53.4
釜ヶ台	旧小中学校	340.0
冬 師	農村婦人の家	354.0

第二節 鳥海山北麓の自然環境と暮らし

(一) 由利本荘市

(1)概観

秋田県の南西部に位置する由利本荘市は、長い海岸線を持つ岩城・本荘・西目の各地域と、その東方、南北に連なる丘陵性の山地（出羽丘陵）に位置する大内・東由利の各地域、さらに、県内三番目の規模を有する子吉川を遡り、鳥海山に至るまでの山間部に位置する、由利・矢島・鳥海各地域の合わせて八地域（旧一市七町）で構成されている。

また、神奈川県の大凡そ半分にあたる広大な面積を有する由利本荘市は、日常の生活圏が海岸部から鳥海山二合目までにおよび、その標高差も非常に大きい。西部には日本海、東部には出羽丘陵が位置していることもあり、海岸部と山間部では、一〇度以上の気温差と二m以上の積雪量の違いとなっており、現れている。天気予報においても、「由利本荘沿岸」と「由利本荘内陸」に分けて放送されている状況である。

さらに、鳥海山北麓に位置する由利本荘市は、東部から南部にかけて高尾山や保呂羽山、月山などの出羽丘陵を構成する山々と鳥海山に囲まれていることから、治安維持に適した地形や地勢であるとともに、石沢川や芋川など複数の支流を持つ子吉川水系が、流域の平野部や段丘を広く潤し、藩政期の飢饉を乗り越えて、人々に豊穡をもたらしてきた地でもある。そしてこの恵まれた自然環境こそが、鳥海山をシンボルとする、山と川と海を持ち、千年以上に亘って「由利」と称され、特徴ある風土と文化を育んできた由利本荘市の特徴でもある。

このような恵まれた自然環境の中で生活を営んできた先人たちは、長い歴史の中で、領外から伝播してきた様々な信仰などの精神的な文化や、産物な

どの物質的な文化を受容し、日々の生活の中に融合させ、深化させながら継承してきたものも多く、それが鳥海山北麓文化の基底にもなっている。具体的には、鎌倉時代形成期の関東武士団の出羽国移住という大きな社会背景の中で伝播してきた「熊野信仰」など、山岳信仰の影響を受けて深化させ成立した「出羽三山信仰」や「鳥海山信仰」、近世に隆盛をみた「伊勢信仰」や「鹿島信仰」「金比羅信仰」などを享受し組織された代参講などの様々な「講」、院内銀山や北前船寄港地である本荘「古雪湊」「石脇湊」に全国各地からもたらされた唄や踊りなどの芸能文化の受容は、北麓の文化を形づくるうえで大切な要素であったと考えられる。特に、領外の芸能文化を享受し、本市の風土や気質との融合を図りながら独自の芸能として深化させ成立した「猿倉人形芝居」（国記録選択無形民俗文化財・秋田県指定無形民俗文化財）は、「本海獅子舞番楽」（国指定重要無形民俗文化財）や「鳥海山北麓の獅子舞番楽」（国記録選択無形民俗文化財）とともに、由利本荘市の文化遺産であり、鳥海山北麓の文化を構成する代表的な民俗芸能のひとつになっている。

猿倉人形芝居は、明治時代初期、鳥海地域百宅ももぢの池田与八が、ハサミ式の独自の人形芝居として考案・成立させ、東北一円さらに、北は北海道から南は東京まで巡業し、当時多くの人形劇団に影響を与えた芸能である¹⁾。特筆すべきは、池田が考案したこの猿倉人形芝居は、当時鳥海山麓の村々を廻っていた関東の旅芸人の芸が、考案のきっかけになっていることである。池田は、由利地域新上条の宿屋に宿泊していた関東の貽売り父娘の芸に興味を示して、人形操りや囃子唄を習っており、それが始まりとされている²⁾。

このほか鳥海山北麓、とりわけ由利本荘市の特徴ある文化の構成要素としては、「獅子舞番楽」のほか、「獅子踊り」や伊勢信仰を基底に継承されてきた「伊勢系太神楽」、祭祀行事では、「裸参り」「大仏祭り」「八朔祭り」「虫除け祭り」「梵天祭り」「岩城なまはげ」などが、特徴的な行事として今に伝えられている³⁾。

領外からもたらされた様々な文化を享受し、独自に深化させ、親から子へ、そして孫へと世代を超えて受け継いできたこれら精神文化は、多くの社会変動を乗り越えて、講中や保存会、集落、各家庭において大切に守り続けてきた北麓の民共有の財産であり、地域共同体の結束、地縁関係をより強固なものとする原動力になっている。ここでは、東北の厳しい自然環境の中で、「自然との共生」を図りながら生きてきた人々の「神々との共生」「人々の共生」の姿、そして、江戸時代後期から昭和初期における芸能文化享受の一例を紹介したい。

(2) 自然との共生

独立峰として東北で最も高い鳥海山は、「大物忌神」として古より崇拜の対象となり、山麓の人々に多くの恵みを与える神として、大切に扱われてきた。またその一方で、その雄姿と度重なる火山活動が相まって、古代より神階奉授が繰り返され、兵乱や疫病などの災異を予兆する神、国家信仰の山として畏れ崇められてきた。このことは、『続日本後記』や『三代実録』など古代に記された記録のほか、正二位上の神階を与えられた経緯からも知ることがができる。

鳥海山は、古代には国家の守護神として、中世には出羽国の中心的な信仰の山として崇敬され、修験組織の形成とともに、修験者によって登拝道が切り開かれ、近世にはさらに農業神として崇拜された結果、一方では畏れられながらも「出羽の富士」として親しまれ、多くの人々が講を組織して登拝するなど、庶民の生活の拠り所として重要な位置を占めてきた。春雪解けの雪形を見て農作業開始の時期を見極める行為などは、その典型的なものである。現在は、旧登山道を活用し五合目まで整備された観光道路を利用して、春から秋にかけて山菜などの山の恵みを求める人や、観光客、登山客などで賑わっている。

また、鳥海山を源として由利本荘市を貫流している子吉川は、県内で最も流れが速く、県内三番目の規模の一級河川であり、雪解け水を含む豊富な水量が、多くの支流とともに平野部や段丘を潤し、古くから恵みの川として大切にされてきた。一度大雨に見舞われると氾濫を招き、人々に甚大な被害を与えてきた川でもあるが、それでも人々は流域から離れることなく集落を維持し、生活を営んできた。現在、子吉川やその支流の段丘上では縄文時代の遺跡が多く確認されており、数千年に亘って川の流域に住み、恵みを享受してきたことが分かる。

子吉川の洪水記録は数多く残されているが、集落移転を余儀なくされた実例として、延宝四年（一六七六）七月の大洪水記録がある。これは、複数の家屋が流失する中、住地（現由利地域新上条）に住み続けることが困難となった人々が集落ごと移転し、新たな集落「新上条」を形成した例である。しかし、この新たに形成した集落「新上条」も、子吉川からさほど離れていない場所に再形成されているのである。畏れながらも、子吉川の流域を選んで住み続けてきた事例である。

一方鳥海山も、人々に恵みを与えるとともに、一旦噴火活動が始まると、数年間にわたって麓の人々や農作物に甚大な被害をもたらしてきた山である。古代より現代まで、多くの歴史書や日記等に噴火記録が記されている。その一冊『出羽国風土略記』の記録によれば、元文五年（一七四〇）五月下旬から翌寛保元年（一七四一）九月までの一年三カ月間にわたって鳥海山が噴火し、噴煙活動があった。記録には、「噴火後四、五年間、河川に魚類を見ることがなかった。田畑の作物はことごとく被害を受けた」とある。また最も新しい噴火記録としては、昭和四十九年（一九七四）三月一日に全日空の定期便が発見した小噴火がある。大きな被害は無かったものの、この小噴火でさえ、鳥海地域では降灰や子吉川の酸性化など、人々の生活に影響を与えている。

由利本荘市は、市の全域が国の「豪雪地帯」に指定されている。中でも東由利・矢島・鳥海の各地域は「特別豪雪地帯」に指定されており、降雪量が非常に多い地域である。その中でも特に鳥海地域の百宅集落では、積雪量が2mを超えるのが通例となっている。このため鳥海地域では、冬季間住宅玄関口に「あまや」と呼ぶ木造のトンネルを付ける家が多く見られたものである。「あまや」は、住宅の大戸口から道路までの仮設通路で、長いものは一五mに達するものもあったという⁽⁸⁾。規模は小さいものの今でも百宅集落で多く目にする事ができる。雪国に生きる人々の知恵の一例である。

天明四年（一七八四）、庄内から三崎山を通って象潟に入り、本荘から子吉川沿いに矢島街道を進んで鳥海地域を歩いた三河（愛知県）出身の紀行家、菅江真澄は、紀行文『秋田のかりね』において、「雪がこやみなく降りつもり藁屋の軒の高さになって、竹の林などは、かくされて岡のように見えた」と記し、翌日の記録には、「屋根の上から雪がくずれおち、地震のように震動した」と、雪国に住む住民にはあたりまえに思える出来事を、初めて雪を体験する真澄は、新鮮で驚きを交えた表現で記録している⁽⁹⁾。時は江戸時代中期の天明四年、旧暦十月八日と九日である。現在の十一月中旬の鳥海地域伏見での出来事であり、冬の到来が早かったこと、降雪量も多かった当時の自然の厳しさを、間接的ではあるが、西日本で育った菅江真澄の記述から知ることが出来る。また、この『秋田のかりね』における真澄の記録からは、江戸時代中期の雪国の暮らしを垣間見ることが出来る。真澄は、鳥海地域伏見の宿とした家で見た光景を次のように記している⁽¹⁰⁾。

「乙女らが薪をくべ、「むまた」という木の皮を糸によつて袋をつくるといって、これをつむじという物に巻き、手しろですりまわし、また藤蔦を糸によるといって、夜なべ仕事をしていた」

「むまた」とは科しなの木のことである。江戸時代中期の鳥海地域において、客が寝ている側であっても、いつもと変わらず冬の夜なべ仕事として、子供

も手伝つて囲炉裏の明かりで作業している姿が想像される⁽¹¹⁾。

このように鳥海山北麓に住してきた人々は、古くから鳥海山・子吉川など自然に対する畏敬の念を持ちながらその恵みに感謝し、洪水や豪雪などの厳しい環境を受け入れ、自然と共生してきた。信仰心が篤く温厚で粘り強いと言われる気質は、ここからきているのかもしれない。

(3) 神々との共生

厳しい自然との共生を図り、山や川などあらゆるものに神を見だし、精進しながら様々な「まつりごと」を地域共同体である各村落や家々で行ってきた人々は、伝統行事を通して主人公である神々と融合し、恵みを享受して生きる力を高めてきた。

特に、農業を基盤としてきた北麓の人々は、豊穰の神である宇賀うがのみたまのかみ之御魂神を祭神とする稲荷神社を多く勧請して屋敷の外内に祀るとともに、本地仏である馬頭観音を集落内や神社境内に祀ってきた。各集落には、産土神を祀る神社がそれぞれ鎮座しており、毎年集落民あげて例祭が行われている。田の神、山の神などの去来神や「岩城なまはげ」などの来訪神を祀るほか、「講」を組織して多くの神々を祀り信仰心を高めてきた。神を尊び、神を畏れ、神を信じ、そして願い、神を抛り所として暮らしてきたのである。霊峰鳥海山の麓、鳥海山信仰の息づく神聖な域の中で、人々はより信心深く、神々とも生きてきた。鳥海山北麓は、そんな地域である。

そこでここでは、これら暮らしの中心を成す「まつりごと」の中から、伝統的な行事⁽¹²⁾や大黒様、山の神、十二月の神々の年取り⁽¹³⁾に焦点をあて、北麓の人々の神々との関わりについて紹介したい。

私たちの生活は、労働に従事する普段の日と、それとは異なる特別な日に分けられる。前者の日は「ケ」であり、後者の日を「ハレ」と呼んで区別している⁽¹⁴⁾。この「ハレ」にあたる伝統的な行事を紹介して神々との関わり

表1 鳥海山北麓の伝統的な行事(由利地域) 調査年:一九九〇年(『由利の民俗 下巻』より)

月日	行事名等	行事名(方言)
一月 一日	若水 火起こし	ワカミズ ヒオコシ
一日	箒立て	ホウキタテ
一日	朝祝事	アサイウエゴト
一日	初詣・初参り	ハヅマエリ
一日	三ヶ月の心得	サンガニチノココロエ
一日	供え物	ソナエモノ
一日	本家礼	ホンケレイ
一日	春祈禱	ハルギド
一日	星祭	ホシマヅリ
二日	のさうえ	ノサウエ
二日	馬放し	ウマハナシ
二日	とろろめし	トロロメシ
二日	親子礼	オヤコレイ
二日	おひぎ	オヒギ
六日	若木迎え	ワガギムゲ
六日	セリタラ叩き	セリタラタダキ
六日	爪切湯	ツメキリユ
六日	仕事始め	シゴトハジメ
七日	七草雑炊	ナナクサゾウヘ
七日	親子礼帰宅	オヤコレイキタク
七日	御魂飯	ミタママ
七日	馬の餅	ウマノモチ
十一日	蔵開き	ジツチヨウビラキ
十一日	法螺貝	ホラガイ
十四日	餅つき	モチツキ
十五日	小正月の年越し	コシヨウガツノトシコシ
十五日	ゴンギョウ	ゴンギョウ
十五日	鳥追い	トリポイ
十五日	雪中田植	セツチュウウエ
十五日	成木責め	タメシ
十五日	こねうち参った	コナエウチメッタ
十五日	仲人礼	ナガドレイ
十六日	神精進	カミシヨウジ
十七日	百万遍念仏	ヒヤクマンベン
十七日	鉦のつき始め	カネツキ
二十日	しめ正月	シメシヨウガツ
二十日	やひたて	ヤヒタテ
十六日~二十日	嫁の休日	ヨメノキユウジツ

月日	行事名等	行事名(方言)
二月 一日	歳祝	トシイウエ
三日	節分 まめまき	マメマキ
十六日	山の神・田の神	タノガミ
十七日	祝年祭	キネンサイ
二十八日	道元講	ドウゲンコウ
三月 三日	雛祭	ヒナマヅリ
十四日	涅槃	ネハン
十八日	彼岸	ヒガン
二十一日	中日	チュウニチ
二十一日	諷誦あげ	フジアゲ
四月 十五日	祭典	マヅリ
十六日	馬頭観音様の祭	マヅリ
二十九日	天長節	テンチョウセツ
二十九日	忠魂祭	チュウコンサイ
五月 五日	ごろえじ	ゴレエジ
五日	菖蒲湯	ショウブユ
五日	魔除	マヨケ
五日	てげこと	テゲコト
五日	菖蒲叩き	ショウブタタキ
六月 五日	虫祭	ムシマヅリ
六月	さびらき	サビラキ
六月	運動会	ウンドウカイ
六月	若勢宿	ワガゼヤド
六月	早苗饗	サナブリ
七月 一日	休日	ヤスミ
十三日	祇園様	ギオンサマ
二十三日	地藏様の宵宮	ヨイミヤ
二十四日	地藏様の祭	マヅリ
三十一日	精霊だち	シヨリダチ
八月 六日	精霊立ち	シヨリダチ
六日	墓払い	ハガハレ
六日	精霊馬作り	シヨウリヨウバズクリ
十三日	盆	ボン
十四日	盆礼	ボンレイ
十四日	親子礼	オヤコレイ
十五日	お棚	オタナ

月日	行事名等	行事名(方言)
八月 十六日	お棚送り	オグリボン
十六日	精霊たち	シヨリダチ
二十日	しめ盆	シメボン
九月 一日	作祭	サゲマヅリ
十八日	秋祭	アキマヅリ
十九日	九月の節句	クガツノセツク
二十日	彼岸の入り	ヒガンノイリ
二十三日	中日・秋彼岸	チュウニチ
二十九日	しめ節句	シメセツク
十月 十日	カブダチ	カブダチ
十日	念仏講・十日講	ネンブツコウ・トウカコウ
十六日	田の神	タノガミ
十一月 九日	厄神様	ヤクジンサマ
二十三日	新嘗祭	ニイナメサイ・シンシヨウサイ
十二月 一日~七日	オンギョウ	オンギョウ
九日	大黒様	デゴクサマ
十二日	山の神	ヤマノガミ
二十三日	地藏様の年越し	トシコシ
二十三日	太子様	デシコサマ
二十五日	煤払い	ススハギ
二十五日	出替わり	デガワリ
二十八日	餅搗き	モジツギ
(二十日)		
三十一日	年越し	トシコシ

を述べるのであるが、広大な鳥海山北麓では、地域によって名称や内容が若干異なっていることから、ここでは鳥海山北麓の中心部、子吉川中流域に位置する由利地域を抽出して紹介する。これら行事全体から、暮らしに欠かせない神との関係を感じ取っていただきたい。

表1にあるとおり、一月一日の元旦行事から年末の年越し行事まで、年間を通して非常に多くの行事を行っていることが分かる。一覧に記載した代表的な行事のみでも九六を数える。この中で、神や仏、祖霊と関わる行事は、元旦の「初参り」から始まり、厳冬の「百万遍念仏」やお盆の「精霊たち」、「中ちゅうにち日」と呼ばれる行事や、秋から冬にかけての「厄神様」「田の神」「山の神」「オンギョウ」など、行事数は全体の半数以上を数え、神々を主人公にした行事が非常に多いことが分かる。神々とともに生きる北麓の人々の一面を知ることができる。

神を現在でも大切にしている姿、一例として、大黒様を紹介したい。毎年十二月九日は「デゴクサマ（大黒様）の日」と称し、市内各家々では「ジョロウ」もしくは「マツカデゴン」と称する、先が二股になった大根を供え、特別な日として行事を行ってきた。豆料理を一二品供えるのもこの日である。

大黒様の福神信仰は、恵比寿信仰や、田の神などの去来信仰とともに、鳥海山北麓に限らず全国に見られる信仰形態である。但しここ北麓では、社会変化の著しい現在にあっても期日が近づくと、「山の神」とともに、日常会話に普通に登場する身近な神であり、当日大黒様の軸を掛け、膳をこしらえて供える家は今でも多い。守り伝えることの重要性和、神を大切に作る気質が現在に良く現れている例である。

祖霊的な性格をもち、自然崇拜と豊作祈願が一体化した去来信仰の代表的な神である「田の神」は、農業・林業・漁業等農業全体を守護する神として、民間信仰の中に深く息づいている神である。二月十六日、山の神が里に降り

て田の神となり、田畑の豊穣を見守る神となる。また、十月十六日には山に帰って山の神となる。十二月十二日は山の神の年取り（年越しとも言っている）の日であり、「ゴシモチ」を一二個供えて祀る日である。必ず天候が荒れると信じられている日でもある。豊作や作業の安全を願って祈る行事であり、農業や林業を生業の中心にしてきた北麓の人々にとっては、現在でも非常に大切にしている行事である。なお、「ゴシモチ」とは、一般にシトギ餅と称しているもので、米の粉で作る餅である。

北麓の人々にとって、毎年十二月は、年中行事の中でも神々に関わる行事が非常に多い月である。先に述べた大黒様や山の神のほか、神々の年取り行事が十二月一日から始まるからである。一例として、鳥海地域で行われている年取り行事は、十二月一日の「おかの神（宇賀之御魂神）」から始まり、三日の「オノ神」、五日「恵比寿様」、六日「機神はたがみ」、八日「薬師」、九日「大黒」十一日「神明様」、十二日「山の神」、二十三日「地藏様」があり、膳を供える日でもある。神々と共同飲食して年取りを祝うとともに、一年の労を労う大切な行事として今に伝えられている。

このように鳥海山北麓は、信仰と深い関わりを持つ民俗芸能や祭礼行事のほかに、各家々でも鳥海山信仰を背景に多くの「まつりごと」を行い、神々と深く関わり、共に生きてきた、そして今も生きていく地域である。

(4) 人々の共生

北麓の人々は、それぞれ自らが生まれ育った、または嫁いだ集落を、生活共同体・運命共同体として意識し、集落に溶け込み、家族的な交わりの中で苦楽を共にし、生きてきた。本家・分家関係のほか、冠婚葬祭時に特に力を発揮する「トナリエツケ（隣縁家）」と呼んでいる隣家との強い地縁関係など、今でも非常に大切にしている姿が見られる。このことから、生活共同体としての意識が非常に強い地域であることが分かる。かつて「結むす」と呼ば

れた農作業、特に田植え時の共同作業や、農作業一段落時に行われた宴「さなぶり」、山林や田畑などの共有財産の管理に伴う共同作業、神社の祭典など、一年を通して集落民が団結して作業する機会が多かったことも、現在に引き継がれている強い地縁関係の背景にあるといえる。

民俗芸能が豊富な鳥海山北麓において、数百年にも亘って芸能が継承され、今日も盛んに行われている背景には、保存団体の持つ、地縁関係を中心とする強い結びつきが重要な要素になっていると考える。そしてまた、この地縁関係をより強固なものとし、集落民ひとり一人の結びつきを強くしているもうひとつの要素として、祭礼行事を挙げることができる。そこでここでは、名称のみではあるが、人々をより強く結びつけているものとして、由利本莊市を代表する祭礼行事を、各地域別に紹介する。

表2 各地域別の由利本莊市を代表する祭礼行事

(『由利本莊市民俗芸能と祭りガイドブック』二〇一五年より)

地域名称	祭 礼 名 称
本莊地域	新山神社裸参り・石脇さんぶつ・赤田大仏祭り・本莊八幡神社祭礼
矢島地域	木境大物忌神社の虫除け祭り・矢島神明社八朔祭り
岩城地域	熊野神社祭礼(旧藩祭)・刻参り・岩城なまはげ
由利地域	森子大物忌神社祭礼・飯沢菖蒲叩き・曲沢精霊だち・前郷日枝神社祭礼・蒲田天神講
大内地域	岩谷麓ワタワタ・切通稲荷神社梵天祭り・折渡地藏尊祭礼
東由利地域	東由利しめ張り行事・館合の鹿島送り
西目地域	湯保八幡神社祭礼
鳥海地域	笹子盆踊り・月山神社笹子八朔祭り

現在これら祭礼行事は、単に集落の組織や集落民の結びつきを深めるだけではなく、それぞれが特徴ある行事として継承されており、現在由利本莊市の文化を代表する行事になっている。ここでは、これら祭礼行事の中から、

村落組織をより強めている行事のひとつとして、東由利地域で継承されている「しめ張り行事」を紹介したい¹⁴⁾。

藁で注連縄を製作する際、頭と尾を取り付けて大蛇のように製作することは、「勧請縄」「勧請つり」として、かつては全国に見られた行事である(角や手足が伴うため、「籠」であると考えられる)。由利本莊市でも、かつては全域で行われていたものであるが、現在は本莊地域の一部と東由利地域六集落で行われているのみであり、このことから東由利の行事については、「東由利のしめ張り」として、現在秋田県記録選択無形民俗文化財に選択されるなど、非常に大切にされている行事である。

東由利のしめ張り行事は、集落により呼び名が異なり、「へびナワ」とか「しめ縄ぶち」「鬼の注連張り」と呼ばれている。この六集落のしめ張りは、全国に見られる神社の鳥居に取り付けるものではなく、集落外れ両側の道端に取り付ける点で特徴的である。集落民が協力し、一日を要して製作する注連縄は、七mから一〇mあり、集落端部の大木等に架けられる。これは、集落の内と外を区別する道切として境界を設け、集落に悪霊や厄、疫病が入り込むのを防ぐためであるとされているものである。この行為は、単に霊的なものではなく、集落における家と家、人と人との関係をより深く強くする、いわゆる地縁関係を維持し、結びつきを深めるうえで非常に大切な行事であるといえる。東由利地域も、複数の民俗芸能を継承してきた地域である。このような強い地縁関係が、民俗芸能を守り伝えてきた根底にあると言っても過言ではないだろう。

さらに、地縁関係、集落民ひとり一人の関係をより深く結びつけてきたものに「講」がある。「講」は大別すると、信仰的動機による集団と、経済的動機に基づいて組織される集団に分けられるが¹⁵⁾、ここでは、前者の信仰的集団、中でも各集落の人々を講師とし、神や仏、祖霊神と深い関わりを持つ信仰組織についても紹介したい。

鳥海山北麓の由利本荘市内においては、代参を目的とするもの、山岳信仰に基づくもの、厄除け・豊作祈願のものなど、二〇種以上の講が組織され、民間信仰の中心を成してきた。年々減少している講ではあるが、一例として、由利地域で組織されている、またはかつて組織されていた講は次のとおりである。

念仏講・庚申講・甲子講・伊勢講・鹿島講・恵比寿講・天神講・十日講・金比羅講・太平山講・唐松講・羽黒講・万年講・地藏講・古峰講・春日講・青麻講・観音講・神精進講・小高講・田の神講

『由利の民俗 上巻』より

先に紹介した『由利の民俗』の平成十二年調査の結果によると、当時既に消滅していた講は「甲子講」と「神精進講」の二つのみであり、由利地域に組織された講数は全体で二二だったことが分かる。これらの講は、子供が講員となって組織されている「天神講（蒲田天神講は、由利本荘市の無形民俗文化財に指定されている）や、若者を対象とした「恵比寿講」、高齢者で組織されている「伊勢講」や、若妻を対象とした「唐松講」など、一定の年齢層で構成されている講もあり、村落における同世代の結びつきを深めるうえで大きな力を果たしているといえる。

(5) 芸能の享受

鳥海山北麓に生きてきた人々は、山岳信仰や伊勢信仰の伝播と共に享受した「番楽」や「獅子踊り」「神楽」など、信仰と深い関わりをもつ芸能を深化させ、大切に守り伝えながら鳥海山北麓の民俗芸能として定着させてきた。

一方で鳥海山北麓には、このほかにも全国の旅芸人によって今まで様々な芸能がもたらされてきたのも事実である。記録として確認できる古い例とし

て『秋田県興行史』によれば、慶長十七年（一六一二）、鳥海地域笹子の東方、松の木峠を越えた先に所在する院内銀山に、初めて歌舞伎と角力があつたと記録されている⁽¹⁶⁾。院内銀山は、全国に知られた鉾山である。藩政期を通して、矢島の商人たちが日本海の海の幸を、松の木峠を越えて毎日のように院内の鉾山町に運んでいることから、全国から訪れる旅芸人の多くも、藩政期を通して由利本荘市を含む鳥海山北麓全域を巡業していたものと考えられる。

藩政期の院内銀山町における旅回りの芸人記録としては、銀山お抱え医師門屋養安（天明八年（一七八八）〜明治六年（一八七三））の日記にも多く記載されている。銀山町での興行を代表するのは、角力と芝居のようである。その一部を紹介すると、天保六年（一八三五）六月十二日の記録に「芝居之角力も有之、見物夥敷参候」とある。天保十年（一八三九）六月十五日には影芝居や人形芝居も上演されている。また、天保七年（一八四〇）八月十二日の日記には、「大坂浄瑠璃語り巻太夫・長太夫、長床長左衛門添状にて罷越候」とあり、大坂から一座が来て演じている⁽¹⁷⁾。

次に、由利本荘市内における藩政期の記録を紹介したい。本荘藩藩士須藤五郎右衛門の日記である。これによると、天保八年（一八三七）、本荘常照院において江戸大角力興行。弘化二年（一八四五）には、北前船の寄港地「古雪湊」の所在する古雪町において、藩主が若者狂言を鑑賞している記載がある。また、嘉永二年（一八四九）や嘉永五年（一八五二）、安政二年（一八五五）にも芝居興行があつたと記載されている⁽¹⁸⁾。これらの資料から、江戸時代後期、全国の旅芸人による歌舞伎や角力の興行が鳥海山北麓でも確かに行われており、娯楽として民衆に受け入れられている姿が想像される。

こうした状況の中鳥海山北麓においては、旅芸人の歌舞伎興行の影響を受け、北麓の民が自ら歌舞伎を学び、自ら歌舞伎を演じる時代が到来する。江戸時代後期の天保年間（一八三〇〜一八四三）から昭和十年（一九三五）頃

迄の約一〇〇年間である。代表的なものとしては、天保年間、江戸歌舞伎の役者である嵐勝夫から伝授されたとされる「奉行免歌舞伎」、同時代の「前郷歌舞伎」、にかほ市三森で組織、行われた「三森歌舞伎」を挙げることができる。役者、囃子手の全てが集落民である。残念ながら戦前に全て消滅し、現在は衣装や台本が残るのみとなっているが、前郷歌舞伎においては、嘉永七年（一八五四）建立の芝居小屋が、「前郷神楽殿」と名称を変え⁽⁹⁾、役者名が連記された掲額が付けられた状態で保存・活用されている（由利本荘市指定有形文化財）。番楽や神楽など民俗芸能の豊富な鳥海山北麓は、歌舞伎などの芸能も素直に享受してきた風土である。

厳しい自然と共生し、鳥海山信仰を背景に多くの神々と共生しながら、強く太い地縁関係を維持してきた鳥海山北麓の人々は、信仰心が篤く温厚で粘り強い精神を培い、変貌する時代の中で様々な文化の影響を受けながら享受、深化させ、特徴ある独自の文化をつくりあげてきた。現在、全国的にも民俗芸能の豊富な地域として知られている背景には、これら風土が大きく関わってきたことに違いない。

（参考文献）

- (1) 『猿倉人形芝居 ―木内勇吉一座―』本荘市文化財調査報告書第一一六集、本荘市教育委員会、一九九九年三月、26～52頁。
- (2) 稲 雄次「猿倉人形芝居」『国立歴史民俗博物館研究報告』第一〇九集、国立歴史民俗博物館、二〇〇四年三月、321～338頁。
- (3) 『由利本荘市民俗芸能と祭りガイドブック』由利本荘市鳥海山文化の元氣実行委員会、二〇一五年三月。
- (4) 三浦良隆「鳥海山信仰の概要」『鶴舞』第九七号、本荘地域文化財保護協会、二〇一〇年三月。
- (5) 『由利町史』由利町史編纂委員会、一九八五年七月、95頁。
- (6) 『由利町史』資料篇第二集、由利町史編纂委員会、一九六七年発行、64頁。

(7) 『自然・歴史・文化 鳥海山』鳥海山大物忌神社、一九九七年十月、80～98頁。

(8) 『鳥海町史』鳥海町史編纂委員会、一九八五年、1451～1453頁、1600～1640頁。

(9) 『真澄による新秋田紀行 秋田のかりねを行く』秋田県立博物館、一九九七年三月、三浦良隆筆、5～11頁。

(10) 『菅江真澄遊覧記1』東洋文庫54、平凡社、一九九五年、92～96頁。

(11) 『江戸時代 人づくり風土記5 秋田』社団法人農山漁村文化協会、一九八九年七月、264頁。

(12) 『由利の民俗』上巻・下巻・資料編、由利町民俗誌編集委員会編、由利町教育委員会、二〇〇〇年。

(13) 『秋田風俗民俗考』秋田魁新報社、二〇一七年七月、90～95頁。

(14) 「鬼の注連張」『秋田県の祭り・行事』秋田県文化財調査報告書第271集、秋田県教育委員会、一九九七年。

(15) 『日本民俗学の視点1』日本書籍株式会社、一九七六年、42～47頁。

(16) 佐々木清一郎『秋田県興行史 映画街・演劇街』みしま書房、一九七六年、95～99頁、巻末年表。

(17) 高木俊輔「幕末維新期の日記史料―出羽国秋田院内銀山町「門屋養安」の場合―」『立正史学』第一〇〇号、立正大学史学会、二〇〇六年。

(18) 長谷川成一「後期出羽国由利郡の都市民衆―町場の生活と祭祀―」『北奥羽の大名と民衆』清文堂、二〇〇七年、168～183頁。

(19) 『秋田の祭り・行事』秋田県教育委員会編、秋田文化出版、二〇一四年。

（三浦良隆）

（二）にかほ市

にかほ市は南側に二〇〇〇mを超える鳥海山、西側には日本海を併せ持つ風光明媚な街である。鳥海山頂は海岸線からわずか一六kmと近く、海岸、平地、河川、池沼、山地、高山など多様な環境を有している。そのため動植

物の種類が豊富で貴重なものも数多くあり、さらには山と里と海に独自の暮らしの形態がみられる。

鳥海山は農業神・漁業神として信仰されてきたことから、市内には作占いや予祝行事が多く、生活に根付いている。

院内集落(旧仁賀保町)では秋田県の無形民俗文化財に指定されている「七高神社しちこうじんじゃの正月年占としうら行事」が十二月十七日から約一カ月にわたり行われる。御門松おかじまつの神事、大御饌おほみけの神事、御散飯おさばの神事などを宮司と神社役員の行者が行うもので、一年間の稲作の豊凶や天候、災害などを占う。

小滝集落(旧象潟町)では一月七日、金峰神社の七日堂祭で「曼陀羅餅まんだらもちおためし神事」が行われる(写真1)。同集落の年男が前夜についた三升のモチの光沢や五力所に盛った米の散り具合、そしてモチの上で火をつけたお札の燃え方から判断して市内の作柄や天候の状況、社会情勢まで占っている。

関集落(旧象潟町)の諏訪神社では元旦に「酒飲み占い」、六月第一日曜祭典では「おためし」という作占いが行われる。「酒飲み占い」は関の三地域の代表が酒を飲み比べ最も多く飲んだところが豊作になるといふもので、もとはイワシ漁の占いだつたとされる。「おためし」は境内にある作占い所に御幣を立て、御幣が風でどの方向に倒れたかを見て作を占うものである。



写真1 曼陀羅餅おためし神事

さらに横岡集落(旧象潟町)の稲荷宇賀稲倉神社では二月の初午の前日に「石持ち占い」が行われる。氏子たちが「男石」「女石」と呼ばれる二種類の平らな石をつかんで持ち上げて豊作を祈願するもので、高く長く持ち上げるほど豊作になるとされている。

農家の正月といわれる小正月は作占いの要素を含む予祝行事として雪中田植えやサエの

神行事が行われている。旧象潟町の上郷地区では集落ごとにワラでサエの神小屋が作られ、小正月の一月十五日あるいは第二日曜日に火をつけて焼いている。横岡集落および大森集落(旧象潟町)では小屋を焼いた後、子どもたちが害鳥を追い払う鳥追いを行い、さらに大森集落では、鳥追いの際に初嫁がいる家で子孫繁栄を祈願して初嫁棒で嫁をつつくしぐさをする「嫁つつき」を行っている。これら一連の行事は県内でこの地域だけに見られ、わが国の各地で伝えられてきた小正月行事の典型の一つであると「上郷の小正月行事」の名称で国の重要無形民俗文化財に指定されている。

次にかほ市独自の自然環境と人々のかかわりをみてみる。

にかほ市象潟町にある国指定天然記念物「象潟」および金浦・仁賀保の海岸線は、紀元前四六六年の鳥海山の山体崩壊による岩なだれが海に流れ込んで形成された。岩なだれに埋没した樹木を埋もれ木といい、山体崩壊のようすや当時の状況を伝える貴重な資料となっている。

埋もれ木は和室の内装や工芸品の材料として珍重され高額で取り引きされることから、昭和四十年代から五十年代、平成の初めにかけて、主に冬師・釜ヶ台地域で業者によるスギの埋もれ木の発掘が相次いだ。象潟郷土資料館には、同地域の周辺から出土した楔入りの埋もれ木がある。調査の結果、楔は十七世紀中頃から十九世紀初めのものでされるブナ属で、江戸時代にも埋もれ木を発掘して活用していたことがわかった。市内には享保年中、冬師村の人が神代木を掘り出したという古文書が遺っており、それを裏付ける貴重な資料となっている。平成二十六年に日本海東北自動車道の象潟インターチェンジ工事現場からも大量の埋もれ木が出土した。ケヤキ、クリ、コナラ類が多いことから一帯は二五〇〇年前、つまり縄文時代晩期、落葉広葉樹林を主とする林であることがわかった。

この山体崩壊を起源とする「象潟」は、かつて一〇〇前後の島を浮かべた入り江で、松島と並ぶ景勝地であった。古くから歌に詠まれ、その歌枕を訪

ねて江戸期に松尾芭蕉が『おくのほそ道』の旅で訪れた。芭蕉が訪れ、名文、名句を遺したことで「象潟」はさらに有名になり、小林一茶や正岡子規など多くの文人が訪れるようになった。

文化元年（一八〇四）六月四日、夜十時ころ、マグニチュード七・一（推定）の地震がこの地域を襲った。被害は「象潟」を中心として南北六〇kmの日本海沿いの地域に及び、多くの家が倒壊し、記録にあるだけでも三六六人の死者がでた。中でも「象潟」のある塩越町は潰家三八九棟、死者六九人と壊滅的な被害を受けている^①。さらに、この地域で地盤が隆起し、景勝地「象潟」は陸地と化した。象潟地震の最大の特徴がこの現象で、隆起域は「象潟」を中心とする南北二五kmの地域に及び、「象潟」は一八〇〜二〇〇cmほど隆起している。

「象潟」は本荘藩領であり、藩主の六郷氏は景勝地としての価値を失った「象潟」の島々を潰して開田することを決めた。それに反対したのが蚶満寺二四世の覚林である。覚林は蚶満寺を閑院宮家の御祈願所にして宮家の権威を後ろ盾に開田を阻止した。こうして辛うじて島々は残ったが、藩の政策に背いたとして覚林は捕らえられ、獄死した。現在、水田に浮かぶ島々はこの覚林の命と引き換えに遺されたものである。これらの島々は蚶満寺とともにかほ市の観光の目玉の一つであり、芭蕉や文人たちの足跡、往時の面影を求めて訪れる観光客は多い。現在、「九十九島の松をまもる会」や「島守り」などのボランティアが島々の下刈り等を行い、景観保持に尽力している（写真2）。

陸となった現在の象潟は野鳥の宝庫である。四九種の鳥類が見られ、中には天然記念物のオジロワシ、オオワシのほかにオオタカ、フクロウ、チュウサギ、アオサギ等の貴重な鳥類が含まれる^②。平成二十五年にはクロヅルとタンチョウヅルも象潟に飛来した。特にクロヅルは県内で確認されたのは初とされる。

松尾芭蕉は元禄二年（一六八九）六月十六日（陽暦八月一日）に象潟を訪れ、十八日まで滞在した。その間に三句を詠み、そのうちの一句が「汐越や鶴はぎぬれて海涼し」である。鶴は冬の渡り鳥であり、夏の象潟に鶴が本当にいたか、古くから議論されている。「鶴はぎ」は鳥ではなく、裾をまくりあげた人の脛を指すという説もあったが、芭蕉真筆とされる象潟自詠懐紙では、その句の前書きに「鶴おり立てあさるを」とあり、人間ではないことがはっきりしている。九十九島やその周辺には、クロヅルやタンチョウヅルのほかなべヅルやコウノトリも飛来したことがある。芭蕉が詠んだ鶴については、鶴が実際にいた、シラサギなどほかの鳥を鶴に見立てた、鶴はなべヅルのこと、江戸時代は鶴をコウノトリと同一視していたのでコウノトリのこと、空想で詠んだ、などさまざまな説がある。そのほか、芭蕉に同行した河合曾良が「岩上に雌鳩の巢をみる」と前書きし、「波こえぬ契ありてやみさこの巢」と詠んだミサゴも九十九島の周辺に見られる。

なお、「象潟」は昭和九年一月に国の天然記念物に指定され、平成二十六年三月と翌年三月には一部の島が「おくのほそ道の風景地 象潟及び汐越」の名称で国の名勝に指定されている。また平成二十八年九月に日本ジオパークに認定された本市と由利本荘市、酒田市、遊佐町にまたがる「鳥海山・飛鳥ジオパーク」では、象潟九十九島がかほ市の主要なジオサイトとなっている。



写真2 下刈りを行う「九十九島の松をまもる会」の会員たち

標高五五〇mには国指定天然記念物の「鳥海山獅子ヶ鼻湿原植物群落及び新山溶岩流末端崖と湧水群」がある。通称「獅子ヶ鼻湿原」と呼ばれ、特に学術的に貴重なのは、稀産種のコケが大量に生育していること、そして多くの奇形ブナが見られることである。稀



写真3 上郷の温水路群

産種のコケは、日本では鳥海山にしかないヒラウロコゴケ、八ヶ岳と鳥海山にしかないハンデルソロイゴケで、いずれも日本はもちろん欧州各国でも絶滅危惧種となっている⁸⁾。

奇形ブナは根元から折れ曲がったり、コブがあったりするもので、「あがりこ」と呼ばれている。炭を焼くために雪上で伐採し、その切り口から芽が出て成長したものであり⁹⁾、同湿原には炭焼き釜の跡も残っている。奇形ブナは自然だけでなくそこにかかわってきた人々の生業を伝えている。

標高二〇〇mの象潟町上郷地区の扇状台地には落差工のある五本の温水路があり(写真3)、「上郷の温水路群」として秋田県の有形文化財(建造物)に指定されている。鳥海山の水は豊富ではあるが夏でも一〇度前後と水温が冷たく、上郷地区の稲作は冷水害対策が課題であった。大正期に上郷地区上流に水力発電所の開設計画がもちあがり各集落に補償金が支払われ、それを資金に温水路の設置に取り組んだ。

地元の篤農家の発案で、水路の幅を広げて浅くし、勾配をなくしてゆっくり流し、その分段差を設けて空気と混ぜるようにして水温の上昇を図った。昭和二年に日本初の長岡温水路が完成して稲の増収が図られると各集落

も設置し、戦後も新設、改良、増設などが行われ昭和三十二年まで五本の温水路(総延長約六km)が造成された¹⁰⁾。現在、約五〇〇haの水田に用水を供給しており、地元の先人たちの知恵と努力の結晶として誇りとなっている。

そのほか平沢町(旧仁賀保町)には農村改革に尽力した先人がいる。県内で初めて乾田馬耕を推進した齋藤宇一郎(一八六六―一九二六)と、その子でTDK株式会社

を創業し「農工一体」を実現した齋藤憲三(一八九八―一九七〇)である。

宇一郎は、父茂介の遺志を継ぎ、田の増収を図るために乾田馬耕を導入して成果を上げた。乾田馬耕は冷害にも強いことがわかり、県令から全県に奨励され、平沢町(旧仁賀保町)から近村、郡内、全県へと普及が広がった。

憲三は宇一郎の三男で、農村を貧困から救うためには副業が必要と考え、様々な事業を模索し、最後に「東京電気化学工業株式会社」を創業した。戦時中に工場を東京から平沢町に移し、農家の二男、三男を雇い、農業と工業が一体となって豊かな地域をつくるという「農工一体」を推進した。現在にかほ市はTDKおよび関連の企業が多く、県内屈指の製造業の街となっている。宇一郎、憲三とも政治家としても活躍し、宇一郎は衆議院議員として農業振興に尽力し、憲三は平沢町長を経て衆議院議員になり日本を技術立国にするため科学技術庁の創設などに取り組んでいる。

にかほ市の沿岸部にも独自の自然がある。この地域は対馬海流の影響で、秋田県内で最も温暖な地域である。そのため南方系の植物の北限でもあり、北方系の植物と入り混じる特殊な地域でもある。

中でも暖かい地域の沿岸によく見られるタブノキの群落や林などは、秋田県内では本荘・由利地域にしか見られず、しかも自然の状況がよく保存されていることから一部は秋田県の天然記念物に指定されている。本市では川袋集落(旧象潟町)の「タブの群落」、「前川のタブノキ」(旧金浦町)、「金浦のタブ林」の三件が県指定となっている。

さらに、象潟地区の社寺林には一つの場所に南方系と北方系を代表する植物が混生している例がある。関集落の諏訪神社の社寺林はタブ・シナノキの混生群落で、南側斜面に暖温帯を代表するヤブツバキやタブノキの常緑広葉樹が、北側には冷涼な地域に多いエゾイタヤやシナノキなどの落葉広葉樹がはつきり分かれて生えている。また、長岡集落の熊野神社の社寺林はツバキ・ブナの混生群落で、ヤブツバキやタブノキの常緑広葉樹とブナやシナノキな



写真4 由利海岸波除石垣

どの落葉広葉樹が、混じって生えている。これらは大変貴重であり、市の天然記念物に指定されている。

飛地域（旧金浦町）と芹田地域（旧仁賀保町）の海岸には国指定史跡の「由利海岸波除石垣」がある（写真4）。本荘藩二万石の助成を受けて築造したことから「万石堤」とも呼ばれた。目的は荒ぶる日本海の波浪や強風から海岸を保全するとともに、海岸ぎりぎりまで開かれた農地や波打ち際を通る北国街道を保全するためである。近世の海岸保全や農地開発の歴史を知るうえで貴重な土木遺産となっている。



写真5 金刀比羅神社のまげ絵馬

にかほ市は江戸時代中期から明治時代中期にかけて北前船の寄港地であった。塩越湊（旧象潟町）、金浦湊（旧金浦町）、三森湊・平沢湊（旧仁賀保町）があり、それぞれの湊に北前船の史跡や文物が遺っている。塩越湊周辺には一六の神社があり、全部で一三一点の船絵馬が遺されている。本荘由利海岸には二〇〇点余りの船絵馬が現存するとされ、その半分以上が塩越湊周辺にあることになる。その中には戸隠神社に安永九年（一七八〇）四月に奉納された「永久丸」の船絵馬があり、これが秋田県で一番古い船絵馬とされている¹⁰。そのほか金刀比

羅神社には北前船の乗組員がシケにあった際に髻を切って祈願したという「まげ絵馬」が遺っている（写真5）。
金浦湊は、広さが三一間、深さが七尺ほどで、塩越湊とともに

に出羽国有数の湊の一つであった。本荘藩最大級の漁港であり、また北前船の風待ち湊としての施設も備えていた。金浦出身の先人に日本で初めて南極に到達した南極探検家の白瀬矗（一八六一〜一九四六）がいる。白瀬矗中尉は少年時代、沖の北前船や頻繁に行き交う小廻り船を常に目のあたりにしており、そのことも探検家を志すきっかけになったと考えられる。明治四十五年（一九一二年）一月二十八日にわずか二〇〇ト余りの小さな木造帆漁船を改造した「開南丸」で、南緯八〇度〇五分まで達し、付近を大和雪原と命名した。この快挙も、むかし北前船に乗った経歴のある野村直吉船長（石川県羽咋市出身、一八六七〜一九三三）の航海技術の力が大きいとされている¹¹。
三森湊の近くには日和山のえびす森、三王森が見られる。いずれにも方角石が遺っているが、えびす森の方角石は現在、仁賀保勤労青少年ホームに展示されている。平沢湊近くの丁刃森にも方角石があり、仁賀保地域には三個遺る。このほか北前船関係の方角石が金浦地域に二個、象潟地域に一個あり、秋田県内ではこのほか能代に一個あるだけであり、さらに全国でも五〇数個しか確認されていないことから、この地域に方角石がいかに多いかわかる¹²。また、平沢湊の近くには現在、室町時代の長享元年（一四八七）の創業で、日本で三番目に古いとされる酒の蔵元「飛良泉本舗」がある。もとは廻船問屋で酒造が副業であり、当時の廻船問屋の取引状況を伝える貴重な資料が遺っている。

にかほ市の北前船関連の史跡や文物は平成三十年五月に日本遺産「荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間〜北前船寄港地・船主集落」に追加認定された。

（註）

（1）象潟町『象潟町史 通史編上』二〇〇二年三月、6頁。

（2）象潟町『象潟町史 通史編上』二〇〇二年三月、169頁〜172頁。

- (3) 荒川隆史「鳥海山の埋もれ木から分かること」『雄波郷』第十一号、にかほ市教育委員会
ほか、二〇一七年三月、3～4頁。
- (4) にかほ市教育委員会『にかほ探訪』、二〇〇六年三月、111頁。
- (5) マンサク会『鳥海山の自然と生物』、二〇一八年九月、211頁。
- (6) 象潟町『象潟町史 通史編上』二〇〇二年三月、534頁～544頁。
- (7) 横山正義「天然記念物「象潟」の歴史と自然」『雄波郷』第九号、にかほ市教育委員会ほか、
二〇一五年三月、39～47頁。
- (8) にかほ市教育委員会『天然記念物 鳥海山獅子ヶ鼻湿原植物群落及び新山溶岩流末端崖
と湧水群 緊急調査報告書』、二〇〇九年三月、31頁。
- (9) 中静 透『象潟町中島台「奇形ブナ」林の成因に関する調査報告書』、一九九八年一月。
- (10) 吉川栄一「大自然の恵みを享けてく上郷の温水路群」『雄波郷』第十号、にかほ市教育
委員会ほか、二〇一六年三月、4～5頁。
- (11) 象潟町『象潟町史 資料編Ⅰ』一九九八年三月、898頁。
- (12) 象潟郷土資料館・白瀬南極探検記念館・仁賀保勤労青少年ホーム展示室「三館合同企画
展 北前船の軌跡」白瀬南極記念館、二〇〇九年六月。
- (13) 註(12)に同じ。

(齋藤一樹)